HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	イーゴリ遠征譚（訳及び注）(VI)
Author(s)	木村, 彰一
Citation	スラヴ研究, 23, 87-94
Issue Date	1979
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5080
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113045.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

イーゴリ遠征譚

（承　前）

木村彰一訳

149.　ヤロスラーフよ，フセスラーフのなべての子たちよ！　いまははや，おみたちは旗を伏せ，こぼれたつるぎを鞘におさめるほかはない。

150.　おみたちはもはや父祖のほまれを離れたのだ。

149.「ヤロスラーフよ，フセスラーフのなべての子たちよ」——J Ярославе (PA ,) и вси внуце Всеславли! (P ! なし) Szeftel (La Geste, 137) は P. Vjazemskij の説を踏襲し，このヤロスラーフは，Černigov の Jaroslav Vsevolodovič (115 の注参照) を指すものと考え，149–151 は，1180 年，Ol'goviči 系の公たちである上記 Jaroslav と Igor' (Slovo の主人公) とが Druck の Vseslaviči 系の公たちを攻めて Polock の地を侵した事件を暗示するものと説いています。なおこのとき Vasil'ko の二人の息子，Polock の Vseslav と Vitebsk の Brjačislav をふくむ Vselaviči 系の公たちは，Jaroslav や Igor' に味方して，同族の公たちと戦いました。すなわちこの戦いもまた，作者が批難してやまない《котора》のひとつであったわけです。Ipatij 年代記 1180 年の項参照。

このような解釈に対して，Lixačev (*op. cit.*, 450–452) は，PA の Ярославе を Ярослали (すなわち彼によれば Jaroslav Mudryj の子孫たち) と訂正しています。その理由は，この箇所のコンテクストから言って，「作者が念頭においているのは，何か大きな歴史的現象」であることは間違いなく，したがって，長年にわたる《которы》をやめよという作者のアピールは Jaroslav Mudryj の子孫と Polck の Vseslav の子孫との全部 [すなわち当時のロシアの公のほとんど全部—— S. K.] に対するものと見てはじめて納得がゆく，というにあります。一見魅力的な説ではありますが，Stelleckij (*op. cit.*, 185–186) が L. Dmitriev の説を引いて言っているように，12 世紀末においては Jaroslav の子孫は jaroslavli (ないし jaroslaviči) ではなく，ol'goviči, ないし monomaxoviči とよばれていたはずであり，また，151 の「異教の勢を…フセスラーフの国へと引き入れた」の「フセスラーフの国へ」(на жизнь Всеславлю) はロシアの国全部を指すとは考えられず，さらにまた，私見によれば，149 の внуце Всеславли も，151 の на жизнь Всеславлю も，あきらかに 153 以下の Vseslav についての記事への橋渡しの役割りをになっていますから，Lixačev のこの提案は結局受け入れがたいものと思われます。

「いまははや，おみたちは旗を伏せ…」——уже понизить стязи свои, вонзить свои мечи вережени「旗を伏せ」「つるぎを鞘におさめる」ことは，Lixačev (*op. cit.*, 452) の言うとおり，「敗北の自認」を意味するものでしょう。つまり作者は，Jaroslav にせよ，Vseslaviči にせよ，どちらも大義名分のない《котора》ないし《крамола》に熱中し，あまつさえ「異教の勢をロシアの地へと引き入れ」(151) て，それぞれの父祖 (すなわち Oleg Svjatoslavič および Vseslav Polockij) のほまれをけがした以上は，双方とも負けたも同然である，と言いたいのです。

なお，不定形 понизить, вонзить は多くの研究者 (例えば最近では Lixačev, Obrębska-Jabłońska, Stelleckij, Nahtigal) が命令法 понизите, вонзите にあらためていますが，その必要はありますまい。不定形語尾 -ти の -ть への apocope は 186 にも быть という例があり (P князю Игорю не быть кликну [scil. кладьнику ?])，不定形構文は例えば 83 に例があります (J Уже намь своихъ милыхъ ладъ ни мыслію смыслити ...)。なお La Geste, 262 参照。

150.「父祖のほまれを離れた」——выскочисте изъ дѣднѣй славѣ これは 144 J [...] Изяславъ сынъ Васильковь [...] притрепа славу дѣду своему Всеславу と同巧異曲の表現です。Vasil'ko の子 Izjaslav は Gorodec の戦いでリトワニア人と戦って死んだ (144–145 の注参照) ことによって，同じく Vasil'ko の子 Vseslav と Brjačislav とはリトワニア人を味方にして同族の Vseslaviči と戦った (151 の注参照) ことによって，ともに дѣдъ (祖父，実は曾祖父) Vseslav Polockij の слава を傷つけたわけです。

151. おみたちは，いさかいに我を忘れて，異教の勢をロシアの地，フセスラーフの国へと引き入れたのだ。

152. そのあらそいにつけ入って，世も末のいま，ポーロヴェツの地の果てから，トロイアの国を，よこしまがおそったのだ。

151.「おみたちは，いさかいに我を忘れて…」——J Вы бо своими крамолами начясте (A начасте) наводити поганыя на землю Рускую, на жизнь Всеславлю. 149の注にあげた1180年のJaroslav-Igor' 対 Vseslaviči との戦において，前者は polovcy を，また彼らに味方した Vasil'ko の子 Vseslav と Brjačislav とはリトワニア人を援軍としていました。(Ipatij 年代記 1180年の項参照)。

[...] на землю Рускую, на жизнь Всеславлю は「ロシアの地，すなわち Vseslav の領国へ」ではなく，「ロシアの地（の一部），すなわち Vseslav の領国へ」の意味でありましょう。なお жизнь はここでは現代ロシア語の достояние, богатство に当たり，(Lixačev, *op. cit.*, 454)，したがって жизнь Всеславлю は「(かつて) Vseslav の領有していた Polock 公国」を指します。

152.「そのあらそいにつけ入って…」——J Которою (PA Которое) бо бѣше насилие отъ земли Половецкыи (P !) на седмомъ (P На седьмомъ A наседмомь) вѣцѣ з(емли) (PA なし) Трояни (P Трояни A Зояни). (P . なし) PA の Которое を Которою (<котора) と訂正することについては，Lixačev をはじめ筆者の寓目しえたすべての注釈書が一致していますが，отъ земли Половецкыи на седмомъ вѣце 以下については，Lixačev, Stelleckij, Nahtigal は PA の！を採用して Половецкыи! で文を切り，そのあとは P を生かした На седьмомъ вѣцѣ Трояни で新しい文をはじめ，次の (La Geste では153の) връже Всеславъ жребій 以下につづけています。ただ Obrębska-Jabłońska (*op. cit.*, 141) だけは文の切り方は Jakobson と同様ですが，з(емли) は挿入していません。しかし Трояни の訳は na ziemię trojańską という，Jakobson の解釈を受け入れた訳になっています。Jakobson のテクストは，A の Зояни に注目し，M では з(земли の略字) Трояни となっていたに違いないと推定した結果にもとづいたものです。

私見によれば，この1節の解釈にあたっては，J 75–77 との細部にわたる類似をぜひ考慮に入れる必要があります。(152)「そのあらそいにつけ入って」(J которою)——(77)「公たちは…やがてはわが身にかえるべきいさかいのたねをまく」(J начяша князи [...] сами на себе крамолу ковати)；(152)「世も末のいま」(J на седмомъ вѣцѣ)——(75)「はや哀傷の時は来た」(J Уже [...] невеселая година въстала)；(152)「トロイアの国を，《よこしま》がおそったのだ」(J бѣше насилие [...] з(емли) Тгояни)——(76)「…《よこしま》があらわれたのだ，その《よこしま》は，乙女となってトロイアの国にしのび入り，ドン近き青海原に，白鳥のつばさはためかせ」(J Въстала обида [...]: вступил(а) дѣвою на землю Трояню; въсплескала лебедиными крылы на синѣмь морe, у Дону) このように対比してみると，両者の呼応関係は一目瞭然であります。とくに諸公の「内訌」(котора, крамола) によって，「トロイアの国」(*земля Трояня) が「よこしま」(насилие, обида) の見舞われおそうところとなった，という作者の根本思想がほぼ同じ措辞法によって表現されていることは，けっして偶然とは思われません（ちなみに насилие と обида とに同じ「よこしま」という訳語をあてたのは，La Geste の H. Gregoire 訳——双方とも la violence——にならったものです)。ところで *земля Трояня とは，Szeftel の説に従えば (La Geste, 101 f., 137 f.; なお14への筆者の注参照)，10世紀末から1060年ごろまでは torki の，それ以後は polovcy の夏期における滞在地であった Dnepr から Donec に至る Azov 海沿岸地方 (на синѣмь морe, у Дону) を意味しています。また76の「乙女となってトロイアの国にしのび入」った обида は，75–78の注で紹介した Jakobson の研究によれば，窮極的には1185年，Igor' たちの敗戦によって起こった polovcy の侵入とそれによる南ロシアの荒廃を指すものにほかなりません。だとすれば152の насилие もそれと同じように解釈できるはずであり，従って Szeftel (La Geste, 137) が152は「1065年以来の Vseslav の数度の戦闘と，1068年の polovcy の大勝」のことを言っているのだ，と説いているのはあたっていないように思われます。

次に筆者がかりに「世も末のいま」と訳した на седмомъ вѣцѣ とは何か。長い間研究者たちをなやませてきたこの難問題は Jakobson の詳細な考証 (La Geste, 297 ff.) によって，見事に解明されたと言っても過言ではありません。すなわち彼によれば，ここに言う「第7の вѣкъ」とは第700年期でなく，ビザンチンの天地創造暦による第7000年期を意味するもので，このような例はブルガリアや，古代ロシアの文献にしばしば見られるところです。例えば：о вѣцѣхъ мира отъ Адама до сего времени минуло есть вѣковъ 6 , а седмаго вѣка минуло 644: тысящь бо лѣтъ вѣкъ есть

153. フセスラーフ，うまし乙女を得んものと，賽を投げた。

154. 計を用いて，槍を支えに，キエフ目指して身をおどらせ，古き都のこがねのみくらに柄をふれた。

единъ. (Хронологическая статья Кирика, 1136〔=6644〕) この解釈を念頭においた上で，すでに75-78の注で述べた事実，すなわち Igor' たちの敗北とそれにつづく polovcy の侵入があった1185年は前記天地創造暦の6693年，つまり第7000年期の第700年期のおわりにあたること，この第7000年期はビザンチン・ブルガリアの終末観文学では世界の滅亡の時代と予言されていること，76の дѣва-обида の形象は，上記終末観文学の代表作の一つたる Pseudo-Methodios の或るギリシアの version の，世界の終末にさいして出現する parthenos adikiā に当たると考えられること，ロシア年代記の6000と600とが重なった6600 (=1092) 年代のはじめの記事には Pseudo-Melhodios からの引用ないしその réminiscence がとくに多いこと，などを想起するなら，152は，75-78と同じように，作者が1185年の諸事件を，世界の滅亡がはじまったのではないかという深刻な危機感を持って受けとめていたことを示す一節と取らねばならぬはずです。こう考えてきますと，この作品の中で2度も述べられている当時の終末観と強く結びついた作者の危機意識をまったく無視して，на седмомъ вѣцѣ 以下を Vseslav の事跡に結びつける Lixačev その他の解釈が，いかに不当なものであるかは多言を要しないと思われます。

153. フセスラーフ——Всеславъ この Vseslav は Polock の公 (1044-1101) Vseslav Brjačislavič で，Vladimir I Svjatoslavič が Polock の公 Rogvolod の娘 Rogneda (64への注参照) を無理強いに妻にして生ませた Izjaslav の孫にあたります。彼の名は所有形容詞形もふくめてすでに144, 149, 151に出ており，これらの箇所はたぶん153-163のこの人物にかんするかなり長い digression への伏線であったろうと思われます。以下 Vseslav の事跡のうち，Slovo の内容に関係のあるものを Ipatij 年代記から摘記します。

1) 彼の母は魔法によって (от волъхвования) 彼を生んだ。魔法使いたち (волъсви) たちのすすめにより，彼は生まれるとき頭にかぶっていた「膜」(=大網膜？) (язва, язвено) を一生涯鉢巻にしてしめていた。彼か流血をものともしない (немилостивъ есть на кровопролитье) のはこのためである (1044年の項)。

2) 1067年彼は戦争をはじめ (заратися)，ノーヴゴロトを奪取した (1067年の項，除村訳では p. 125)。なお，Szeffel (La Geste, 140) の引いている第3 Novgorod 年代記，1067年の記事によれば，このとき Vseslav は町に火をかけ，聖 Sofija 教会の全財産と，大燭台 (複数) と，鐘 (複数) とを奪っています。

3) Vseslav が Novgorod を攻略したことを知ると，Jaroslav [Mudryj] の3人の子，すなわち Izjaslav, Svjatoslav, Vsevolod は，戦士たちを集めて Vseslav 攻撃に向かった。彼らは Minsk を攻略した後，Nemiga へ追撃した。「Vseslav は彼らに向かって出動した。両軍は3月3日，大雪の日に，Nemiga [川] のほとりで相会し，互いに攻撃しあった。激戦で (бьстъ сѣча зла)，多くの者がたおれた。Izjaslav, Svjatoslav, Vsevolod が勝った。Vseslav は逃げた。(1067年の項，除村訳では125)

4) 同じ年の7月，Izjaslav, Svjatoslav, Vsevolod は十字架に接吻して危害を加えぬと誓ったうえ，Vseslav をおびきよせた。Vseslav が Dnepr を渡ったのち，Izjaslav は誓いを破り Smolensk 近くの Orša 川のほとりで Vseslav を捕え，Kiev へ連れて行き，人びとは彼を二人の息子とともに牢獄に投じた (и вьсадиша и в порубъ съ двѣима сынъкома) (1067年の項，除村訳では125)

5) 1068年，Izjaslav, Svjatoslav, Vsevolod の軍は，Al'ta 川のほとりで polovcy と戦って破れ，polovcy が Kiev 地方を荒した。Kiev の住民たちは，[大公] Izjaslav に向かって polovcy と戦うために武器と馬を (оружья и кони) 与えることを要求したが，Izjaslav はこれを拒否した。Kiev の人びとは反乱を起こし，Vseslav を牢獄から (ис поруба) 連れ出して，彼を Kiev 大公の位につけた。Izjaslav はポーランドに亡命した。Vseslav は Kiev に7か月間君臨した。(1068年の項，除村訳では126 ff.)

6) 翌1069年，Izjaslav はポーランドの Bolesław [Śmiały] とともに Vseslav 攻撃に向かった。Vsesav はこれを迎え撃つために出動し，Belgorod まで来たが，夜半に Kiev の人びとにかくれて，Belgorod から Polock へ逃れた (бывшю нощи, утаися Кыанъ, бѣжа из Бѣлагорода къ Полотьску) (1069年の項，除村訳では130)

153-154. ここで作者は，Vseslav の事績のうち中心的な位置を占める1068年の Kiev 大公位奪取の

155. かと見れば，血にかわくけものとなって，夜半のころ，人目しのんでベールゴロトをおどり出た，青霧に身をばつつんで。

てんまつを語っています（153の注5）参照)。「うまし乙女を得んものと」（о дѣвицю себѣ любу）の「うまし乙女」がほかならぬその大公位を指すことは，諸家の指摘するとおりです。

「計を用いて，槍を支えに，キエフ目指して身をおどらせ」——J Тъи клюками подпръ ся (P подъпръся) о копии, (PA кони, и) скочи къ граду Кыеву (PA ,) Jakobson が PA の о кони, и を о копии に改めたのは，154に дотчеся стружіемъ（槍の柄でふれた）とある上に，古代ロシア語に добыти копиемъ, възяти копиемъ（武力で奪取する）という軍事用語があることを考慮した結果です（La Geste, 92)。ところで大公位を手に入れるために，乗るかそるかの勝負に出（「賽を投げ」 връже [...] жребій),「計器を用い」(клюками),「武力に訴え」(подпръся о копии),「Kiev へ跳んだ」(скочи къ граду Кыеву）というのは，Vseslav のどのような行動を指しているのか。私見によれば解釈はふたとおりありうるようです。

1) Vseslav は Izjaslav によって Kiev 郊外の牢獄（порубъ）につながれていたが，Kiev 市民の反乱が起こると，これに乗じて一挙に大公位を奪取しようとたくらみ，市民となんらかの取り引きをし（例えば Ipatij 年代記1068年の項所載の市民による Izjaslav 邸の略奪？)，この武装蜂起をたくみに利用して，郊外の牢獄から大公の邸のある Kiev の「山の手」（вьрхъ）へ急いだ。以上は年代記の記事の許す範囲での推定にもとづいた解釈で，例えば Lixačev (*op. cit.*, 455 f.) はこの解釈を採用しています。さらに彼はあくまで年代記の記事を尊重する立場から，PA の о кони を生かし，Vseslav は Izjaslav が馬を与えなかった（153の注5）参照）ために反乱を起こした Kiev 市民に馬を与えることによって反乱を成功させた，これが клюками подпръ ся о кони の意味である，とまで主張していますが，いかがなものでしょうか。少なくとも Vseslav が Kiev 市民に馬を与えた事実は，年代記には見当たりません。それにしても，市民たちによって解放された Vseslav が Kiev 郊外の牢獄から「山の手」へ「跳んだ」(скочи) という image は，「夜半」に Kiev を出て，「夜いまだあけぬに」トムータラカンに着く（159）ほど足の早かったこの人物にはあまりふさわしいとはいえないような気がします。

2) Vseslav は，かねがねねらっていた Kiev 大公位を手に入れるために，乗るかそるかの勝負に出た。そして，計略をめぐらし，「魔法によって」生まれた（153 1）参照）者にふさわしくあたかも槍を大地につき立てて空をとぶような早さで兵を動かし，Polock から一挙に Kiev をついた。以上は史実をあえて無視した，むしろ反対に魔術者としての Vseslav 伝説の motif の一つである韋駄天走りを強調した解釈で，159の image ともよく合います。もっともこの解釈では Vseslav のめぐらした「計略」が何であったかははっきりしませんが，そういえば 1) の解釈の，市民との「取り引き」にしたところで，じつは年代記には一語もしるされていないことで，従ってたんなる憶測にすぎません。のみならず，もしあくまで年代記の記事を重く見るとすれば，「計略」を用いたのは Izjaslav であって，Vseslav でなく（153の注4）参照)，この意味で Slovo の本文と矛盾するわけです。総体的に見て，hyperbole や métaphore を縦横に駆使した153–163は，あきらかに Vseslav 伝説の影響を色濃く受けており，後述のごとく，細部に至るまで史実と合致する155においてすら，Vseslav はまぎれもなく魔術者として描かれているくないですから，こうした contexte の中では，筆者は 2) の解釈をとることのほうがむしろ自然だと考えるものです。

「古き都のこがねのみくらに柄をふれた」——J дотчеся стружіемъ злата стола Кіевьскаго (P Кіевскаго) стружіемъ も копиемъ 同様武力行使を暗示していると思われますが，ここで копиемъ の語を避け，また възяти でなく дотъкнути ся を用いて дотчеся стружіемъ と言ったのは，Vseslav が Kiev 大公だったのはたかだか7か月に過ぎないからでありましょう（153の注5）参照)

155.「血にかわくけものとなって，夜半のころ，人目しのんでベールゴロトをおどり出た」——J Скочи отаи (P отъ нихъ A отнихъ) лютымъ звѣремъ въ плъночи (A полночи) (PA ,) изъ Бѣлаграда (P Бѣла-града A бѣла-града): (PA ,) この1句は，1069年，捲土重来の Izjaslav を迎え撃つために Belgorod (Kiev の西約24キロの所にある町，現在の Belogorodka 村）まで来た Vseslav が，夜中にひそかにそこを脱出して Polock へ向かった事実（153の注6）参照）をふまえていますが，脱出に当たって彼がおおかみに身を変えたというのはもちろん年代記にはない描写で，おおかみへの変身という韋駄天走りと並ぶ Vseslav 伝説のもう一つの motif を援用したものです。

лютый звѣрь は古代ロシア語における вълкъ の異名で，вълкъ がタブーであった関係でそのかわりとして euphémiquement に用いたもの。こうした例はほかにも見られます（例えば Čiževska, *op. cit.*, лютый の項参照)。

156. このフセスラーフ，幸運をつかむこと両三度。――ノーヴゴロトの門うち破り，ヤロスラーフのほまれをくじき，

P の отъ нихъ を отаи に改めたのは，上（153の注6）参照）に引いた Ipatij 年代記のテクスト утаися Кыанъ にヒントを得たものでしょう（La Geste, 92）。もちろん多くの注釈者のように（例えば Lixačev, *op. cit.*, 457）P の отъ нихъ を生かして，нихъ をキエフ市民と解することも可能ですが，この代名詞に該当する名詞が前に見当らないという難点があります。

以上，「人目しのんで」，「夜半」，「Belgorod 脱出」というの3つの détail は，年代記の記事とぴたりと一致し，「おおかみへの変身」だけが Slovo の詩的独創です。なおこの motif は 157, 159 でも繰り返されます。

「青霧に身をはつつんで」――J обѣси ся (P обѣсися) синѣ (A сине) мглѣ. (PA ,) Lixačev (*op. cit.*, 457) はたんに обнятый ночной тьмою の意味だと述べていますが，再帰動詞アオリスト обѣси ся は魔術者 Vseslav が人の目をくらますためにおおかみに変身した上，みずから青い霧に「身を包んだ」意味に解すべきでしょう（Obrębska-Jabłońska, *op. cit.*, 143参照）。

156.「幸運をつかむこと両三度」――J Утръже (P утръ же) вазни с три кусы (P воззни стрикусы A вазнистри кусы)――(PA――なし) Slovo のいわゆる темные места のひとつ。ここではかりに Jakobson の読み方に従いました。この読み方は A の утръже вазнистри кусы を，1字も改めずただ вазнистри を вазни с три と切って3字にしただけのもので，あたかも28の J въ ста зби (cf. P въ стасби) と同じ着想といえましょう。утръже は教会スラヴ語 утръгнути "arracher, saisir" のアオリスト形，вазни は女性名詞 вазнь "chance (fortuna, tukhē)" の単数生格形，с（＋対格）は概数を示し，кусъ は "morceau, bout, bouchée" を意味すると彼は言います（La Geste, 241-243）。なお Jakobson の現代ロシア語訳は трижды ему довелось урвать по кусу удачи となっています。ただし Jakobson はその трижды [...] по кусу がどのような史実を指しているかは明言していません。

この読み方は Lixačev も支持していますが（Труды Отдела древнерусской литературы Института русской литературы АН СССР, XVIII (1962), 587参照），Stelleckij はこのような текст はこの作品の стиль にも，образы にも，ритимика にも矛盾する，と批判しています（*op. cit.*, 189）。彼自身の読み方は утрь же вознзи стрикусы (=a nautro вонзил секиры), Nahtigal のそれは утрѣ же възньзи стрикусы (=zjutraj pa zasadil bojne sekire)。両者とも стрикусы は *стрикус の複数対格，*стрикусは古代高地ドイツ語 strît-ackus (現代ドイツ語 Streitaxt) に由来すると見る Potebnja 以来の読み方に従っているわけです。なお *стрикус はロシアの文献には見当たらない語です。

他方，Obrębska-Jabłońska (*op. cit.*, 143) はこの箇所は treść niezrozumiała だとして飜訳をあきらめたうえで，Potebnja や Jakobson の説よりは，вънзи (о)стры кусы と読む L. A. Bulaxovskij の説（Сборник статей, М.-Л., 1950, стр. 157-8 [筆者未見]）の方が contexte にもっとふさわしいのではないかと言っています。кусы はここでは Bulaxovskij によれば「野獣の歯」を意味します。

彼女も指摘するように，Bulaxovskij の読み方が，魔術者 Vseslav の image のにきわめてよく合致していることはたしかでしょう。なぜならこの読み方によれば，夜半におおかみとなって（лютымъ звѣремъ）青霧につつまれて Belgorod から姿を消した Vseslav は，翌朝には（утрѣ же）はやくも「するどい牙をつきたてて」Novgorod の門をうち破り，その勢いを駆って，おおかみに変身し（влъкомъ）Nemiga へ走ったことになるからです。Nemiga の戦いは Vseslav が Kiev 大公となるよりも前の事件ですから（153の注2）参照），このような描写が史実に合わないのは言うまでもありませんが，このこと自体はこの contexte では大して重要とも思えません。ただ Bulaxovskij の説の難点は，Obrębska-Jabłońska もみとめているとおり，名詞 кусъ を「野獣の歯」の意味に使っている用例がロシアの文献にも方言にもひとつとして見当たらないことです。

「ノーヴゴロトの門うち破り，ヤロスラーフのほまれをくじき」――J отвори (P оттвори) врата Новуграду (P Нову-граду A Нову граду), (A .) разшибе (A Раз шибѣ) славу Ярославу. (P , A :) 作者は154で1068年の Vseslav の Kiev 大公位奪取，155で翌1069年の Belgorod からの脱出をのべたあと，ここではそれらの諸事件に先立つ Novgogorod 攻略（153の注2）参照）を語っています。ヤロスラーフは Jaroslav Vladimirovič (Mudryj) (f. 1054) を指します（5. старому Ярославу, 6o. давьныи великыи Ярославь 参照）。Novgorod は988年 Vladimir から Jaroslav に与えられて以来（Ipatij 年代記，同年の項，除村訳では80）「Jaroslav の町」として知られていました。1045年には Jaroslav の息子 Vladimir がこの町の公として Kiev の Sofija 教会を模した，そ

157.　おおかみとなってネミーガへ走り——麦打ちの平場を踏んだ。ネミーガの岸に敷いたは，穀束ならで人の首。穂を打つは，フランクのはがねのからさお。人の命を平場に積んで，箕にかけて，身と魂を吹き分ける。

158.　ネミーガの血に染む岸に，まかるるは，野の幸ならで，ロシアの子らの骨また骨。

159.　公として諸人を裁き，公としてあまたの町を治めたが，夜半ともなればおおかみとなって走った。キエフの都を抜け出でて，夜いまだあけぬに，はやトムータラカンに走り着く。大ホルスの行く手をすらさえぎりとめたこのおおかみ。

れと同名の教会の基礎をおいています（Ipatij 年代記，同年の項，除村訳では 113)。Vseslav の Novgorod 攻略は，1 世紀以上もつづいた Jaroslav（およびその子ら）のこの「ほまれ」(**слава**) をおびやかすものだったわけです。

157.「おおかみとなってネミーガへ走り」——J **Скочи влъкомъ** (A **волкомъ**) **до Немиги**, 以下 158 のおわりまでが Nemiga の戦闘（153 の注 3）参照）にかかわる部分です。ここでも Vseslav は 155 におけると同じく「跳躍するおおかみ」としてえがれています。Nemiga は Berezina の支流 Svisloč の支流。当時この川にのぞんで Nemiga という町があり，戦闘はこの町の前面で行なわれたもののようです（La Geste, 141 参照)。

「麦打ちの平場を踏んだ」——J **съду токъ** (P **съ Дудутокъ** A **съ дудутокъ**) 従来は P の texte どおり読んで，「Dudutki から」と訳していました（例えば Lixačev, Nahtigal, Stelleckij)。Dudutki は Karamzin によれば Novgorod に近い町の名の由ですが典拠は不明です。これに対し Jakobson は **дуду-** を古代ロシア写本に散見する音節の redoublement の誤りと見て **съду токъ**（麦打ち場を踏んだ）と読み，「麦打ち場」を戦場の métaphorique な表現と解するわけです（La Geste, 92)。すぐ下で人の首が穀束に，また戦闘が麦打ちゃ吹き分け（**веяние**）やたねまきにたとえられており，またげんにこうした contexte で同じ **токъ** が 157 にもう一度用いられていること——J **на тоцѣ животъ** (P **животъ**) **кладуть** (P **кладутъ**)（人の命を麦打ち場に置く）——を思えば，この **съду токъ** という読み方はきわめて妥当なものという気がします。それに Jakobson が同じ箇所で引いている Potebnja の説では，ロシアの民話で bogatyr' が一騎討ちをするとき，《**дми точок**》といえば，それは《**очищай место для поединка**》の意味だと言います。なお戦闘を農耕にたとえることは，すでに 67 にその例が見えています；J **чрьна земля подъ копыты костьми была посѣяна, а кровію польяна: тугою взыдоша по Руской земли.**

「ネミーガの岸に敷いたは，穀束ならで人の首」——J **на Немизѣ снопы стелють** (P **стелютъ**) **головами**, Stelleckij (*op. cit.*, 191) の引いている Potebnja の説によれば，造格 **головами** は，《**дъсками съставивъ корабль**》,《**церковь бяшеть создана бѣлымъ каменемъ тесанымъ**》の **дъсками** や **каменемъ** と同じく《**[вещество], из коего что-либо делается**》をあらわします。これに従うとすれば，上の 1 句の直訳は，「穀束を首で作ってまく」となります。

159.「キエフの都を抜け出でて…至り着く」——J **исъ** (P **изъ**) **Кыева дорискаше до куръ** (A ,) **Тмутороканя,** (PA ;) **до куръ** は《**до пения петухов**》，つまり「にわとりの鳴くえに」「夜明けまえに」の意味。夜があけると魔法の力が失われるのでこのおおかみは夜のうちに Kiev と Tmutarakan' との間を一往復しなければならなかったわけです。ここでも Vseslav の韋駄天走りの motif が hyperbolique な手法で描かれています。ところで Vseslav と Tmutarakan'（29 の注参照）との関係について年代記に何ひとつ語られていないことは諸家の指摘するとおりです。そこで Tmutarakan' の名は Stelleckij (*op. cit.*, 192) が L. A. Dmitriev の見解を引いて言うように，「非常に遠い所」としてあげられているに過ぎない，とも考えられます。ただ Szeftel (La Geste, 141) は，年代記 1068 年の項に，1061 年 Izjaslav に憎まれて Kiev を去った Tmuatrakan' の修道院長 Nikon が Kiev に帰ったとあること，この Nikon は A. A. Šaxmatov によれば年代記に採られた 1068 年の事件（153 の注 5）参照）の記事の筆者であること，この記事は Vseslav に同情的であることなどを手がかりにして，Vseslav が Tmutarakan' へ夜中に走ったという Slovo の 1 句は，反乱の直前に彼が自分に好意をよせる Tmutarakan' のコーカサス人とひそかに気脈を通じたことを暗示しているかもしれない，と述べています。

「大ホルスの行く手をすらさえぎりとめたこのおおかみ」——J **великому Хръсови** (P **хръсови** A **хръ сови**) **влъкомь** (P **влъкомъ** A **волкомь**) **путь прерискаше.** ホルス（Хорс）は古代ロシアの異教の神。太陽神と考えられています。

160. 朝まだきポーロツクなるソフィヤの鐘が，朝の祈りを告げたとき，この公はキエフにあってそのねをきいた。

161. 心は魔術師，身は二つのこの公も，あまたたび悲運に泣いた。

162. さればこそ，神にも似たる神人ボヤーン，この公を予言して，かくは歌った。

163. 《妖術をあやつる者も，狡知にたけたる者も，声高らかに鳴く鳥も，神の裁きをのがるるすべなし》。

164. おお，ロシアの国よ，いにしえの世，いにしえの公たちをしのんで，汝のなげくときは来た。

165. そのかみの，かのヴラジーミルを，なんびともキエフの丘にとどめることはなし

---

160. 「朝まだきポーロックなる…そのねをきいた」——J Тому въ Полотьскѣ (P Полотскѣ A Полоть скѣ) позвониша заутренюю рано у Святыя Софея въ колоколы (PA :) а онъ въ Кыевѣ звонъ слыша. 《Святая София》はどうやら Vseslav 自身が建立したと思われる (La Geste, 142, Lixačev, *op. cit.*, 459 参照) Polock の教会の名。全文の趣意は，通説では，Vseslav は Polock の聖 Sofija 教会の彼のための (тому!) 朝の祈禱の鐘が鳴っている間に Polock を出て，まだ鳴りおわらぬうちに Kiev へ着いた，というふうに解釈されています。この解釈によれば 159 における と同様，Vseslav の韋駄天走りのめざましさが強調されているわけです。Szeftel (La Geste, 142) はさらにこれに加えて，これは Vseslav が Polock および Kiev の二つの公国を同時に支配したことの symbole でもあると説いています。他方，Lixačev (*op. cit.*, 459) はこうした解釈に異をとなえ，この箇所は，言うまでもなく (конечно), Polock の Sofija 教会が，自分たちの公であり，教会の建立者でもある彼のために祈禱をささげたとき，Vseslav は Kiev の牢獄で呻吟していた，という意味に取るべきだ，つまりこれは次の 161 の Vseslav が「あまたたび非運に泣いた」という 1 句につながるものだ，と主張し，Obrębska-Jabłońska (*op. cit.*, 144) もこれに同調しています。いずれの解釈にもそれぞれ理があると思われますが，159 の動詞のテンスがいずれも imperfect (судяше, радяше, рыскаше, дорискаше, прерыскаше) であるのに対して，160 では aorist (позвониша, слыша) になっていることを考慮して，Lixačev の説に従っておきます。

161. 「身は二つ」——J в' (P въ) друзѣ тѣлѣ PA の друзѣ は多くの研究者によって дръзѣ と改められていますか (例えば Livačev, Obrębska-Jabłońska, Stelleckij), Jakobson は La Geste の本文ではいったん дръзѣ としながら，補遺では古代アイスランド語で「おおかみ人間」の形容に用いられる eigi einhamr (=qui a plus d'une enveloppe) をよりどころにして，PA の друзѣ を生かしています (La Geste, 381)。なお другъ はここでは двоякий の意味です (Čiževska, *op. cit.*, 134 参照)

162. 「さればこそ神にも似たる神人ボヤーン…かくは歌った」——J Тому вѣщей Боянъ и пръвое (A первое) припѣвку смысленый рече: Bojan が予言したという意味の表現は 145, 209 にも出て来ます。もっともこのふたつの箇所は пръвое [...] рече でなく，それぞれ 145. J И рекъ Боянъ (PA Боянъ なし); 209. Рекъ Боянъ となっていて，副詞 пръвое (=пьрвое「あらかじめ」) がありませんが，contexte から言って，「予言」であることは明瞭です。

163. 「妖術をあやつる者も… 神の裁きをのがるるすべなし」——J Ни хитру, ни горазду, ни птицю (A ниптицю) горласту (PA горазду) суда божіа не минути (A неминути). この「予言」のはじめとおわりの部分は，《Molenie Daniila Zatočnika》の XIII 世紀の version に《суда де божия ни хитрууму, ни горазну не минути》とあるところから，じつは当時行なわれていたことわざであることが知られます (La Geste, 43; Sfelleckij, *op. cit.*, 193)。これをそのまま引用せず，「鳥」を持ち出したところに作者の詩的な技巧がうかがれると思いますが，P の птицю につづく形容詞 горазду は Jakobson の言うようにおそらく scribe の不注意にもとづく誤りでしょう。彼はこの形容詞が「九分どおり間違いなく」(selon toute probabilité) かんらい горласту (Даль, I, 936: горластый《声の大きい》参照) と書かれていたはずだと推測しています (La Geste, 93)。

164. 作者はここで，みずからの「みだれはらむ世 (《жирня времена усобица》-76) と，Vladimir I Svjatoslavič († 1015) 在世中の「古きよき時代」とを対比しています。

165. 全文の趣旨は，Vladimir は Kiev 周辺の地域だけでなく，ロシア全土の統一と安全とを念願

えなかった。

166. しかるにいまや，かの公の旗，かなたリューリク，こなたダヴィトと，護持してあれど，旗さきは敵と味方にわかれてなびく。

し，たびたび遠征を行なって外敵の侵入を防いだ，というにあります。作者はいわば empire builder としての Vladimir の活動を理想と見，この理想のかがみにてらして現在のロシア諸公のふるまいを暗に批判しているわけです。なお「そのかみのヴラジーミル」(старый Владимир) という表現は6にも出ています。

166.「しかるにいまや…護持してあれど」——J Сего бо нынѣ сташа стязи Рюриковы, (A , なし) а друзіи (A адрузіи) Давыдовы, (P ; A .)「いまや」(нынѣ) の1語は Vladimir の時代との対比をあざやかに浮き立たせています。Rjurik と Davyd については127の注を参照。

「旗さきは敵と味にわかれてなびく」——J нъ роз'но ся (PA рози нося) имъ хоботы пашуть (P пашутъ). (PA ,) хоботоъ は竿についた部分が幅がひろく，先に行くに従って細くなる XII 世紀のロシアの軍旗の先端を指します (Stelleckij, *op. cit.*, 194)。роз'но ся имъ хоботы пашуть は諸公の間の関係について「彼らは協力していない」という意味をあらわします。類似の表現として次の1句を参照：твой щитъ и мой не розно еста (=я с тобою продолжаю находиться в оборонительном союзе) (Ipatij 年代記 1150 年の項) (Lixačev, *op. cit.*, 460参照)。すでに121–122, 127 の注で述べたように，Igor' 敗戦のあと，Končak 汗のひきいる polovcy の一隊が Perejaslavl' 公国へ侵入したさい，Rjurik Rostislavič は Perejaslavl' の公 Vladimir Glebovič の要請に応じて，Kiev 大公 Svjatoslav とともに Perejaslavl' の防衛に加わりましたが，Rjurik の兄弟 Davyd は要請にこたえず，また Končak 軍が Rim (Rimov?) を包囲したとき，Svjatoslav と Rjurik が救援におもむかなかったのも，Davyd が来援に応じなかったためでした。Rjurik と Davyd との旗の先がわかれわかれに (розьно) なびく，というのはこの事実を指しています。